北前船史料など大量500点

学問上貴重な遺産

佐井の旧家で見つかる

膨大な史料を調べる坂井さん(左)と鳴海さん(右)

仏ケ浦に近い下北郡佐井村の小さな漁村の旧家に、江戸時代初期からの北前船の交易記録など、ざっと五百点余りの古文書が保存されていることが確認された。史料は大正時代までの二百年以上にわたる全国各地との商取引の様子を克明に記しており、江戸歌舞伎の本など珍しいものも多い。これほど大量の史料が出てきただけでも県内では異例なうえ、下北の歴史塗り替えを迫る史実も一部分かるなど、学問的にも貴重な遺産として注目されている。

史料の持ち主は、仏ケ浦から車で十五分ほど、戸数約六十の牛滝地区に住む漁協理事坂井三郎さん(五七)。坂井家は、少なくとも江戸時代前後から回船問屋、材木商として巨利をなした家柄といい、坂井さんがこのほど、蔵の中に眠っていた長持から古文書を取り出したところ、絵馬などの調査で牛滝を訪れていた日本海事史学会会員の鳴海健太郎さん＝郷土史家、むつ市在住＝の目にとまり、大変な遺産と分かった。

鳴海さんが十六日まで三回、坂井家に足を運んで調べた結果、古文書は少なく見積もっても五百点は下らない。最も古いのは元禄三年（一六九〇年）の船遭難者大供養記で、江戸期に限っても加賀の豪商・銭屋五兵衛との材木取引請け払い帳、越前・小針屋五郎兵衛や江戸・栖原屋角兵衛らとの材木売買証文など数多くあり、当時は東回り、西回り海運の北前船が牛滝に足繁く出入港している様子がうかがえる。

特に、江戸後期から明治期にかけての取引状況を記す大福帳には佐井、大畑、川内などでのヒバ伐採・搬出の記述が見え、「江戸中期以降は南部藩の留山制度により下北一円の木材伐採は禁止されていた」とのこれまでの見方と食い違っている」（鳴海さん）。源平合戦の歌舞伎のセリフを書き込んだ「御芝居扣（控）」や、脇差（わきざし）、カツラなど歌舞伎を演ずる小道具類を列挙した文書も見つかった。

このほか、船の難破記録、明治十九年に青森に杉皮を移出した送り状などがあり、史料は大正十年のコウナゴ送り状まで約二百三十年に及ぶ長期間にわたっている。往時、坂井家では五百―千石の弁財船を四、五隻所有していたというが、そのうちの一隻のものとみられる船の旗も見つかった。

珍しい江戸歌舞伎の「御芝居扣（控）」

史料の調査は、目録づくりが半分ほど済んだだけで、本格的な整理・解読作業は全く手つかずの状態。鳴海さんは「こうした多数の史料が一度に見つかったのは、下北では戦後初ではないか。よく今まで残っていたと驚いてもいる。調査が進むにつれて、佐井を含む下北の歴史を書き換えねばならない可能性があり、日本海運史にとっても重要な史料だ」としており、坂井さんは「先祖の遺産の全ぼうが早く解明されて、郷土史の充実など関係者の役に立ってもらえれば…」と語っていた。